



有形文化財（絵画）

12. 絹本着色仏涅槃図 1幅

けんぼんちやくしよくぶつねはんず

ぶく

■指定年月日 昭和46年12月10日(1971)

■寸法 縦113.8cm 横117.3cm

■所在地 宝立町金峰寺8-19

■所有者 金峰寺

釈迦は、80歳の春、インド・クシナガラ城外バツダイ河の畔を説教遊化中、病に倒れ、2月15日夜半、涅槃に入った。本来、涅槃は煩惱の火を吹き消すことを意味し、悟りを開いた35歳の成道をもって涅槃と見なすべきであるが、肉体維持の問題を残しており、入滅をもって涅槃とする。この時釈尊は、沙羅双樹のもとで、頭北面西、右脇を下に、右手を手枕にして身を横たえた。諸王・大臣・梵釈・諸天・鳥獣・天竜・鬼畜など多くが見守り、一切有情の悲しみの中に涅槃に入る。その時の様子を描いたのが涅槃図で、天蓋のように覆っている沙羅双樹が白く描かれるのは、世尊の死を悼んで半ば枯葉したとの伝説による。双樹の間の波はバツダイ河の水をあらわし、満月は15日の

夜であることを示す。

本品は、仏像・人物の角張った容貌、バツダイ河や沙羅双樹などを強い筆致と濃い色彩で描いている点などに、宋・元の画風を総合した室町初期仏画の特色を示している。京都東福寺に所属した著名な画家、明兆（殿司役であったので、兆殿司ともいわれる）の作であるとの伝承がある。もとは軸物であったが、現在は額装になっている。奥能登を代表する涅槃図である。